

I 幸福な使信には明確な順序がある。

第一の使信「心の貧しい者」は、当然最初に来る。これがなくては、神を信じる事ができない。他の性質は、この性質の結果として表れてくる。

「心の貧しい」という本当の意味は、「からにする」という事。

これに対して他の使信は、満たされていることの表れ。

私たちは、まず空にならなければ、満たされる事はできない。

福音には、この順序がある。

①自分の弱さの自覚。

②本日の御言葉：自分の罪への悲しみ。

主の山上の説教に真正面から向き合う時、自分の力で実行し得ることができるものはないとわかる。人が御前にあって、徹底的に心の貧しさ＝神なしでは真に無力な自分であるという自覚のある人は幸い。心が貧しいとは、聖書が最大の価値を認めている謙遜（自分の弱さを認め神の心から頼る）な心である。

心が貧しいとは→「わたしは…心碎かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、碎かれた人の心を生かすためである」（イザヤ57：15）。

心が貧しいとは、高慢さがなく、神の前に自分は何者でもない意識している事。

自分の素質、才能、学歴、経験に依存しない。

これらは頼るものではなく、神の栄光の為に用いるもの。神に徹底的に抛り頼む。

「ついにいのちさえも危うくなり、ほんとうに、自分の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、…神に抛り頼む者となるためでした」Ⅱコリ1：9。

II 本日の御言葉。「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから」：4。

この悲しみは、自分の罪を心から悲しむ悲しみ。自分の罪の深い自覚、罪を悲しみ、罪を告白することが、必ず真の救いの喜びの前に来る。これが福音の真髄！

世は、罪の自覚なしに、喜びが欲しいと望む。しかし、それは違う。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか」とパウロは言った。

自分の罪を深く悲しみ、打ちのめされ、自分の罪で神を悲しませている事を自覚している人こそ、主に抛り頼み、神に罪を告白し、赦され深く慰められ主の十字架を喜び、唯一の誇りとする。心貧しく神に抛り頼む人は、一日の終わりに、自分の事を神の前

で振り返る。

「今日、私は何をしたか、何を言ったか、何を考えたか、他の人にどのように振舞ったか」。

主に救われた者として全くふさわしくない考え、思いを隠し持っていた事がわかる。それらの神を悲しませた罪を悲しみ、神に告白し、神に赦され深く慰められる。

真のキリスト者は、他の人のためにも悲しむ。他の人、社会、世界の情勢にも関心を持つ。道徳的混乱、人類の不幸、苦しみを見、戦争の事を聞き全世界の状況を悲しむ。

神の御言葉の光によって、それらが、私達人間の罪が原因であることを知っているから。

人間の罪は、アダムとエバ以来、人の生活に入り込み、

人の生活に苦しみ、不幸、死をもたらした。それゆえに、主イエスは泣かれた。

主はその霊において憤りを覚えられた（ヨハ11：35、38）。

主は、罪を悲しまれた。主は罪そのものの性質のゆえに、恐るべき結果をもたらした故に、悲しまないではいられない。神が、罪、いわば神の心臓を刺し通す恐るべきもの、神に反抗する人間の心、横柄な心、悪魔に耳を傾けた結果として侵入してきた罪を嫌い、憎まれ悲しまれる。

罪を悲しみ悔い改める人たちは慰められる→慰め主なる聖霊によって、

主が自分の罪の為に死んで下さり、

今、私たちの弁護者として神の前に立っておられる事を知る。

完全な赦しを得、慰められる。

真に罪を悲しむ人は、気難しく、冷酷で禁止だけをする人ではない。

不機嫌な人ではない。人生をまじめに冷静に見つめ、かつ罪をごまかさず、悲しみ、悔い改め、赦され慰められ、栄えに満ちた喜び、主御自身を喜ぶ聖なる喜びを持っている。

神は罪の赦しだけではなく、罪からの解放をも与えて下さる（キリスト者の自由＝悪い事を何でもしていい自由ではなく、罪の支配、悪習からの自由。サマーキャンプのテーマ）！

キリスト者は御霊なる神と御言葉の力と神の愛の訓練により

主の姿に変えられて行く。

主は、うめきも、泣きもされた。

しかも「ご自分の前に置かれた喜び（私達の救い）のゆえに」（ヘブ12：2）、はずかしめをものともせず私達の為に十字架を忍んで下さった。

生ける御言葉と御聖霊は、罪（憎しみ、恨み、ねたみ、不品行、偶像礼拝、酩酊、遊興、嘘、偽り、欲張り）とは何か？と主の救いの両方を共に教え、
幸いな人、自分の罪を深く悲しみ、神の告白し、神に赦され、神に慰められる人を新しく創造する。

そのために、私たちは、生ける御言葉を読み味わい瞑想し、私達の罪を聖霊が示して下さい、罪の告白、罪の赦しという慰め、罪からの解放を下さるよう祈り求めよう。神の深い愛、主の十字架の恵み、罪の赦しという深い慰めと罪の支配からの解放を感謝します！

Ⅲ「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします」Ⅱコリ7：10の意味。

①世の悲しみは、自分の罪や失敗を後悔し自分を責め続け自分の心を殺していく。

自死にも至る事があり最後は滅びへ。

②神の御心に添った悲しみは、自分の罪を悲しみ、そこで終わらず、

救いの神に悔い改め（原語：考え直す、転向、改心）、自分を責め続けるのではなく、向きを変え、赦しの神に立ち返り、罪を告白し赦し慰め、罪からの解放の恵みを受ける。 ※証し

Ⅳ 人生には色々な悲しみがある。

憐み深い神は、私達を、御言葉、祈りの交わりの中での深い御臨在、寄り添ってくれる人、深い悲しみを通られた人の証し等を通して、慰めて下さる。神から色々な方法で深い慰めをいただく時、私達も、他の人を慰める（寄り添う、上から目線で語るのではなく、気持ちを聴く）人に変えられる。

「神は、どのような苦しみのときにも、私達を慰めてくださいます。私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、…人を慰めることができます」

Ⅱコリント1：4